

虚空蔵大台滝遺跡の「銅製品小塔」小考 ― 錢弘俣塔相輪の可能性について ―

山口 博之

はじめに

秋田県秋田市にある虚空蔵大台滝（こくぞうおおだいたき）遺跡（図1）から、特徴的な金属製品（報告書第84図2・17・図版58・2・17）が出土している（利部修編二〇〇七「虚空蔵大台滝遺跡」『秋田県文化財調査報告書』第416）。銅製品の「小塔」（図3・1）として報告され、三重塔を具象化した小塔であるという。小稿ではこの銅製品を考察する。その視点は、単独で樹立する小塔ではなく、組み合わせられ、塔身の頂部に樹立する相輪として「小塔」（以下相輪状金属製品）を考え類例を探り、中国で作成された錢弘俣塔との比較検討を通して、その存在意義について整理しようとするものである。

まず相輪状金属製品と比較検討する錢弘俣塔（図5）についてふれておきたい。錢弘俣塔は、中国唐朝滅亡の後建国された呉越国の最後の王、錢弘俣（九二九―九八八）の発願による造塔である。八万四千の数が造られたということから、錢弘俣八万四千塔の名もある。実際にこの数が造塔されたかどうかは不明であるが、多数の造塔を裏付けるように広域（中国・韓国・日本）の出土事例が知られている。このため中国・韓国・日本各国で古くから注目され研究が進められてきた。

塔の構造は、岡崎譲治によれば、蓮華座を備えた須弥壇部と塔身軸部、屋蓋部、屋蓋四隅の方立、頂上の相輪部などからなる（岡崎譲治一九七〇「錢弘俣八万四千塔考」『佛教藝術』76号）。また造塔に関して服部敦子は、もとは中国の阿育王塔伝説を引く、現在の寧波市にある阿育王寺に由緒をもつ、阿育王塔を参考に作成された塔であり、中には『宝篋印陀羅尼經』を納めたという。塔には鉄製と銅製があり、現在日本には銅製塔が九基と、出土例として一部分が得られた二例が確認されている（服部敦子二〇一〇「錢弘俣八万四千塔をめぐる現状と課題」『東アジアをめぐる金属工芸』アジア遊学134）。この塔形は非常に影響力があったらしく、五代以来さまざまな階層で引き続き造営が進められ、さまざまな素材が用いられ、その期間も長く明代にまで及ぶ。阿育王塔を参考に作成された塔形で代表的なのが、中国五代呉越国王錢弘俣の造営した錢弘俣塔である。

錢弘俣塔の日本への将来について、鈴木信は二つの史料が存在するといふ。一つは『龍山勝相寺記』であり、錢弘俣が五金を用いて十万塔を铸造し、五百をもって使者を使わし日本へ領賜したという内容である。二つ目は『宝篋印經記』にある銅塔の記述であり、肥前国の天台僧日延が中国へ渡り帰国したときに携えてきた内容だといふ（鈴木信一九八七

「五代における東シナ海交流の一面―銭弘俶塔を指標として―」『考古学
と地域文化』。日本に製作と同時代に将来されていることがわかる。

なお、日本の研究では銭弘俶塔と阿育王塔の区別があるが、中国の研究では両者を含めて阿育王塔と呼ぶことが多い。さらに付け加えれば、この塔の形を日本中世に造営される、宝篋印塔の祖型ではなからうかとする意見もある。このことについては今回は触れない。

一 相輪状金属製品の出土状況

最初に遺跡の様相と出土状況について報告書により簡単に触れたい。虚空蔵大台滝遺跡は、秋田県秋田市河辺虚空蔵大台滝50-10外に位置し、秋田空港アクセス道路整備事業に係る事前発掘調査として、平成十六年（二〇〇四）に大規模な発掘調査（六五〇〇平方メートル）が行われた。発掘調査では平安時代後期を中心とする城館跡が検出され、当地ではまれな灰釉陶器、編年基準資料として価値が見いだされた多量の小型かわらけが出土し注目された。

ここは秋田市の南東部、雄物川と岩見川の合流点から東に約四キロメートル進んだ岩見川右岸、内陸部を巡ってきた川が平野部に展開する場所にあたる（図2）。遺跡名に冠する虚空蔵は虚空蔵菩薩を想起させるが、『川辺町史』には所在地の豊成神社（星辻神社）の祭神がもとは虚空蔵仏であったと記載され、仏教信仰との関連もある。

遺跡の調査地点は大きく分けて平坦部と斜面に分けられ、平坦部には城館に関わる遺構が多い。小稿にかかる相輪状金属製品は斜面、LS45の傾斜地三層から出土している。

出土地点の西約十五メートルの位置に仏堂ではないかとして注目されたSB1008がある。これは、東西五間×南北四間の東西に長い建物であり、中心軸は調査時の座標北と対応しほぼ南北を指す。SB

1008は斜面部の中腹を選地して広い空間を造り出し、内部には角材などを並べ基礎構造を設け、柱穴には地鎮行為が認められたことから、「仏像などを安置していた仏堂」と考えられるという。「SB1008から西約十五メートルのLS45グリッドからは、I期に含まれる銅製の小塔が出土した」ということであるから、相輪状金属製品は仏堂に関連する資料であるとも理解することができる。

遺跡の継続にはいくつかの画期（Ia期十一世紀中葉、Ib期十一世紀中葉から後葉、IIa期十一世紀後葉）がある。相輪状金属製品は「I期に含まれる銅製の小塔」ということから、十一世紀中葉から後葉の所属時期を考えることができる。また仏堂SB1008はIb期に位置づけられ、十一世紀中葉から後葉にかけての時期に相当する。このように整理すれば、相輪状金属製品は十一世紀中葉から後葉にかけて営まれた仏堂に近接した溝に、同時期に廃棄された資料であるとみておきたい。

さて、十一世紀前後の虚空蔵大台滝遺跡周辺の政治的社会的状況であるが、雄物川の下流には秋田市、上流には大仙市（旧大曲市）・横手市・湯沢市の市街地が広がる。秋田市には古代官衙遺跡である秋田城跡、大仙市には同じく古代官衙遺跡の払田柵跡、横手市には後三年合戦に所縁の金沢柵跡がある。この地域は古代から中世にかけて開発が進行し、政治的拠点が営まれる地域性が認められる。さらに報告書では「本遺跡の主体をなす平安時代後期は、Ia期を含んで横手盆地に本拠地をもつ清原氏が前九年（一〇五一）〜一〇六二の役や後三年の役（一〇八三〜一〇八七）で活躍していた時代で」あり、「城館の主は山本郡西部（荒川）に比定される吉彦秀武と関係する一族の可能性も考えられる。」と記す。平安時代末十一世紀前後吉彦秀武（きみこのひでたけ）などの有力地域権力の城館にかかわる遺跡となろうか。吉彦秀武は後三年合戦の張本として、奥羽の動乱に深く関係する地域権力であることはよく知られている。

まとめれば、虚空蔵大台滝遺跡は十一世紀代の地域権力が営んだ城館跡であり、その中には防護施設のみならず仏堂も営まれていた。生活では、当地ではまれな東海地方周辺で生産された灰釉陶器が使われた。さらにさかんに宴会儀礼が行われたらしく、儀礼に使用された可能性がある大量の小型かわらけが出土した。こうした重要遺跡から相輪状金属製品が出土したことに、まず注目しておかなくてはならない。

二 出土した相輪状金属製品について

相輪状金属製品(図3-1)は「縦九・九センチメートル、基底部径一・三五センチメートル、中央部厚〇・六センチメートル」であり、「青銅製の高さ十センチメートルの塔で、三重塔を具象化した小塔と考えられる。基壇に三つの四角な屋根が付き、中央上位に膨らんだ伏鉢、上に円形の相輪、その上が水煙、宝珠と続く。」と記されている。報告書を踏まえつつ、私見ではあるが小考では次のように考えたい。

まず「基壇」はこのままでは安定しないので、本来は金属塔への接合部分であり、それが外れたものではなからうか。接合が差し込みか溶接かは判断できないが、塔身に装飾された状態での上部と考えておきたい。差し込みの場合は差し込まれた部分が欠失していることになるから、もう少し長くなる可能性がある。ついで「三つの四角な屋根」は相輪の間隔が広いものの四層(A)、「中央上位に膨らんだ伏鉢、上に円形の相輪」は相輪の間隔が狭いものの五層(B)、「水煙、宝珠」は宝珠とその上の装飾品(C)。と理解してみたい。現況断面形(図3-2)を見ると方形や円形をなど様々であり、腐食のため形が崩れている可能性が高い。現況の平面形は方形を呈する部分もあるが、志向したのは円形(図5参照)であった可能性がある。あるいは作成時の情報不足により、本来の形態と離れるという事態が起こった可能性もあるかもしれない。このなか

で割合とはつきりしているのは(C)宝珠である。これは断面図(図3-12のb)を見ると十字形を呈するので、中心に宝珠を据え周りを火炎四枚で装飾する火炎宝珠であり、その上に水瓶状の装飾部品が載っているものと見ることができよう。

(C)の相輪頂上部の装飾は、銭弘俶塔(阿育王塔)にも見ることができる。参考として相輪頂上部の装飾がよくわかる、杭州雷峰塔地宮出土の銀製阿育王塔(図4・雷峰塔地宮銀製阿育王塔〈陳平二〇一一「八万四千阿育王塔(下)」『物華天宝』〉をあげておく。相輪頂部の火炎宝珠と水瓶状の突起がよくわかり、虚空蔵大台滝遺跡出土相輪状金属製品の頂上部の本来の形を想像することができる。また崇福寺塔地宮出土の銭弘俶塔(図5・崇福寺塔出土(浙江省博物館所蔵)〈陳平二〇一一「八万四千阿育王塔(上)」『物華天宝』〉)相輪には多重の宝珠が装飾され、虚空蔵大台滝出土の金属製相輪の本来の姿を想像することができる。

興味深いことに銭弘俶塔では、ほかの部品も変化するのではあるが、相輪の変化形が一番目につく。図4の相輪は唐草文が横位置に展開する五層の寶蓋が重なるが、図5の相輪では平面円形、断面楕円形の宝輪が六層重なる。相輪の変化について、中国の阿育王塔を集成した、黎毓馨の集成からいくつか触れておくと、平面円形、断面楕円形を呈する相輪は刹管に五〜六層の宝輪が載る場合が多く、その間隔は大体が一定であるが、一つだけ離れる場合や、宝輪の大きさがそろわないこともある。さらに浙江省海寧市の智標塔(元代)地宮出土の阿育王塔(宋代)の相輪は九層の宝輪が重なるが、相輪中央部が膨らみ上下がしぼむ独特の形をしている。(黎毓馨二〇〇九「阿育王塔実物的発現与初步整理」『東方博物』第69輯)。このように、相輪は変化が大きい部位になるということには留意しておきたい。報告の相輪の類例が探し得ない原因でもあるうか。

以上の検討から、虚空蔵大台滝遺跡出土金属製品は、銭弘俣塔などに樹立する相輪（頂上部に火炎宝珠が裝飾される相輪）であり、阿育王塔の相輪に変化形が多数存在することを考え、中国で作成された典型例ではなく、日本で作られた変化形（倣製品）であることができないか。また相輪は変化が大きい部品でもあることから、あまり類例のない虚空蔵大台滝遺跡の相輪状金属製品の形状も、許容範囲である可能性がある。こうしたことを念頭に、さらに類例を博搜し検討を深めたい。

三 資料類例と相互比較

相輪とみた場合、いくつかの変化形はあっても類例を見出すことができるのではないかと考え、日本と中国さらには韓半島の十一世紀前後の事例（経筒相輪など）について比較し検討したが、管見の限りではあるが、適切な類例を探し当てることはできなかった。ただ、比較的類似するものとして、和歌山県那智熊野経塚出土の銭弘俣塔（図6）の相輪にたどり着いた。この資料と虚空蔵大台滝遺跡出土品を比較検討してみたい。

（1）和歌山県那智熊野経塚出土の銭弘俣塔の相輪

この資料（図6）は塔身が銅製であり相輪は鉄製となり、塔身と相輪の素材が別になっているものである。大正七年（一九一八）に経塚の副納遺物として出土したものであり、現在東京国立博物館に所蔵されている。

まず、法量であるが、『那智経塚遺宝』によれば銭弘俣塔の相輪を含めての総高が二〇・三センチメートル、基壇幅が七・八センチメートルである（東京国立博物館編一九八五『那智経塚遺宝』）。何らかの力がかかったためか、差し込み部から上で傾斜している。このため相輪は直立していない。同書には実大の実測図（図7）が掲載されているので、これ手掛かりとすれば、相輪の総高は十一・七センチメートル。さし込み部

から上部だけの場合は十・四センチメートルとなり、虚空蔵大台滝遺跡相輪状金属製品は九・九センチメートルであるから、差し込み部から上だけが残っているとすれば近似する。

形状（図7）であるが、まず差し込み部の上に差し込みの軸受があり、この上に相輪間隔が広いもの四層（A）、さらにその上相輪の間隔が狭いもの五層（B）その上に宝珠（C）が載るものと見ておきたい。火炎宝珠の形をとるかどうかは、実見したがよくわからない。

管見の限りではあるが、中国に残されている銭弘俣塔の相輪には、那智熊野経塚出土例のような相輪は存在しない。また本体は銅製であるがこの相輪は鉄製であり素材も相違している。二つの部品が別素材で作られるということも中国では知られていない。従来から言われている様に亡失した相輪を日本で補修した可能性が高いのであろう。

（2）虚空蔵大台滝遺跡例と那智熊野経塚出土例の比較

まず年代であるが、虚空蔵大台滝遺跡例は十一世紀中葉前後の遺構に伴う資料。那智熊野経塚は行營の供養にかかる『金経門縁起』に記される内容と合致する資料が存在することなどから、僧行營にかかる経塚造営にかかわるとされ、年代は十二世紀初め大治五年（一一三〇）年頃であるという（東京国立博物館編一九八五『那智経塚遺宝』）。十一世紀中葉から後葉に埋蔵された、虚空蔵大台滝遺跡出土金属製品と年代的には近い。

次に形状であるが、図3と図7を比較すれば、

○虚空蔵大台滝遺跡例（図3）…相輪間隔が広いもの四層（A）。相輪間隔が狭いもの五層（B）、宝珠とその上の裝飾品（C）

○那智熊野経塚出土例（図7）…相輪間隔が広いもの四層（A）、相輪間隔が狭いもの五層（B）その上に宝珠（C）と見れば、（A）（B）（C）の組み合わせとして、銅製品と鉄製品と

いう素材の違いはあるが相互の類似性をうかがうことができる。

とすれば、年代と法量も近似する虚空蔵大台滝遺跡出土例は、銭弘俣塔の相輪などに使用された部品の可能性がなからうか。日本に伝来する銭弘俣塔の相輪と、那智熊野経塚例を除いて相違するのは、中国で生産された当初の形を保っているのではなく、那智熊野経塚例と同様に国産であるためと考えることはできまいか。

(3) 銭弘俣塔相輪の可能性

さて、虚空蔵大台滝遺跡からは肝心の銭弘俣塔が出土していない。このため上記の考察は推論の域を出ない。しかしながら、遺跡の置かれた地域性から考えるとその可能性を考えられなくもない。

まず、十一世紀前後の虚空蔵大台滝遺跡周辺は独特な地域性を有している。一つ目は古代東北を揺るがした政治的動乱の場所であるということであり、二つ目は天台宗の造形である鏡像が複数存在するまれな地域であるということである。

一つ目であるが、虚空蔵大台滝遺跡周辺の秋田市には古代官衙遺跡である秋田城跡、大仙市には同じく古代官衙遺跡の弘田柵跡、横手市には永保三年（一〇八三）後三年合戦に所縁の金沢柵跡がある。十一世紀、後三年合戦の後に藤原清衡が奥羽を支配し、この地から現在の岩手県平泉町に拠点を移し平泉藤原氏として繁栄した。つまり十一世紀～十二世紀にかけて東北地方を代表する地域勢力の中心がこの地域にあり、後にそれは平泉藤原氏となり奥州から北海道にまで勢力を伸長していくのである。こうした地域性をもつ場所に、当時流行の最先端の品物が入ってくるということは理解しやすい。

二つ目であるが、虚空蔵大台滝遺跡周辺では、久保智康によれば銅鏡の鏡面に仏像などの姿を線刻した鏡像が三面発見されている。まず永延三年（九八九）銘の胎蔵界中台八葉院曼荼羅鏡像、次に長元四年

（一〇三二）銘の諸尊鏡像、さらに紀年銘はないが大仙市水神社蔵の千手観音鏡像（国宝）である。十世紀末から十一世紀にかけて製作された鏡像は、全国で十面あまりしか存在せず、このうちの三面がこの地域に存在することになるという（久保智康二〇〇七「道長の時代における在地仏教―山林寺院と工芸にみる―」『藤原道長』）。重要なのは、これらはいずれも天台宗にかかわる遺例であり、胎蔵界中台八葉院曼荼羅鏡像がある瑞花双鳳八稜鏡の背面には「仏師天台僧蓮如」と刻まれ、鏡像創出の背景には天台の教説が想定できるとされる（久保智康二〇一四「天台の造形世界」『天台学探尋』）。さらに網野善彦によれば、つぎの十二世紀代には天台宗比叡山延暦寺と密接に関わる日吉社の神人が、北陸道を中心とする日本海で活発に商業活動を行ったという（網野善彦一九九八『日本中世の百姓と職能民』）。このように、この地域は早くから天台宗が影響力を持った地域性があつたことを把握することができる。

実は銭弘俣塔とその日本への将来については天台僧が関係している。最初に触れたが、もともと銭弘俣塔は呉越国の最後の王、銭弘俣（九二九～九八八）の発願による造塔である。国土は現在の浙江省と福建省の主要部を占め、貿易を活発に行い契丹・高句麗さらに日本と活発な交易を行なった。呉越国は仏教を厚く信仰した国であり、自国で散逸した仏典を収集しようと努力した。このとき銭弘俣の求めに応じて經典を日本からもたらしたのが、十世紀の天台僧日延である。彼は中国で散逸した天台經典を呉越国に送り届ける使者となり、天曆七年（九五三）に渡航した徳元年（九五七）に帰国した。このとき八万四千塔一基（福岡県福岡市誓願寺所蔵品の銭弘俣塔（重要文化財）がこれにあたるという）と符天曆（唐代の曆法書占星術のテキスト）を将来したと伝えられる。銭弘俣塔に天台僧が関係することになる。そして天台宗はこの地に縁が深いのである。

まとめにかえて

ながながと論を進めてきたが、虚空蔵大台滝遺跡で出土した相輪状金属製品は、那智熊野経塚出土銭弘俣塔の後補相輪と類似していることを考えてみた。虚空蔵大台滝遺跡では銭弘俣塔は出土していないが、銭弘俣塔に樹立する日本で作られた後補の相輪の可能性を想定してみたい。銭弘俣塔の日本への将来には天台僧日延がかかわったことが知られている。天台宗ということに注目すれば、虚空蔵大台滝遺跡周辺では、日本ではまれな鏡像が複数発見され、それは天台教学に関連する可能性が指摘されている。さらにこの地域は十一世紀～十二世紀の東北地方での中心的な政治的位置を占める地域性を有し、平安京との交通には天台宗に関連する日枝社の神人の姿も見え隠れするのである。たしかに現在銭弘俣塔が残るのは真言寺院であり、天台宗と銭弘俣塔との関係はそう単純には結びつかないだろうが（久保智康二〇一〇「総括と展望―東アジアをめぐる金属工芸」『東アジアをめぐる金属工芸』アジア遊学134）。虚空蔵大台滝遺跡出土の相輪状金属製品の位置づけを考えるとときに、重要な視点であることは許されるのではなかろうか。

虚空蔵大台滝遺跡の相輪状金属製品を実見する機会があり、以来ずっと気になっていた。まったく類例を見たことがなかったからである。この前後日本の石造宝篋印塔の源流調査のために旧呉越国周辺を何度か訪問する機会があり、同時に銭弘俣塔（阿育王塔）の実物を実見し、銭弘俣塔との関係が深く印象に残るようになってきた。今回、想定に想定を重ねるという結果にはなったが、『米沢史学』紙上をお借りして、まとめる機会を与えていただいたことに感謝申し上げたい。なお、小稿には五十嵐一治、利部修、久保智康、鈴木信、高橋学の各氏からご教示を得た。中国語文献については四川大学考古学系講師范佳楠氏より多くの情報のご提供を得た。記して謝意を表したい。



図1 虚空蔵大台滝遺跡近景



図2 虚空蔵大台滝遺跡遠景
(中央下部丘陵が遺跡)

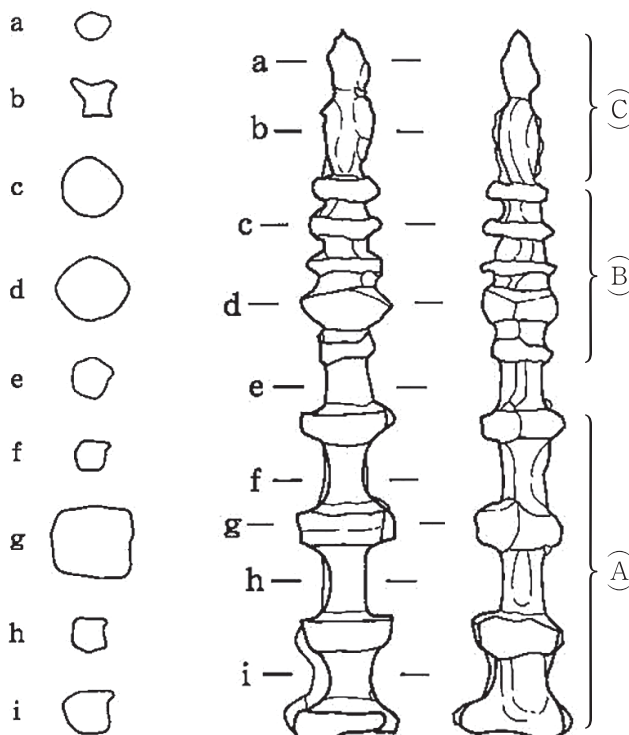


図3-2 虚空蔵大台滝遺跡相輪実測図(断面図)

図3-1 虚空蔵大台滝遺跡相輪実測図(平面図、著者加筆)



图5 崇福寺塔出土
(浙江省博物館)



图4：雷峰塔地宮銀製阿育王塔

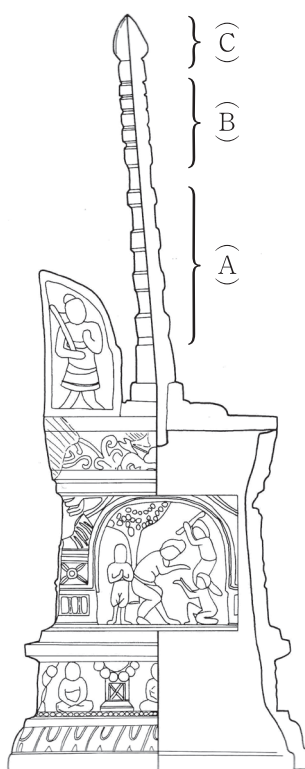


图7：那智山經塚錢弘俶塔実測図
(筆者加筆)



图6：那智山經塚錢弘俶塔正面画像